

うつけ通信 vol. 16

10月30日と11月20日に、東京と大阪の2大会場で、「健康と環境」講演祭が開催されました。イネイト研究会の主催で行われたこの講演祭のテーマは「次世代へ伝える衣食住」。イネイト会員様をはじめとして、たくさんの方に「ご参加いただき、会場はこれまでにない熱気に包まれました。今回のうつけ通信はそのときの宮本先生のお話をお届けします。」

生活環境と健康

おかげさまで、「呼吸する家」の体験ハウスがようやく出来上がりました。最近完成したばかりなのですが、もう既に何十人かの方に来ていただいています。来られた方の中からは、肩こり、冷え性、腰痛などからはじまって、顔の歪みまで治ったという報告をいただいています。

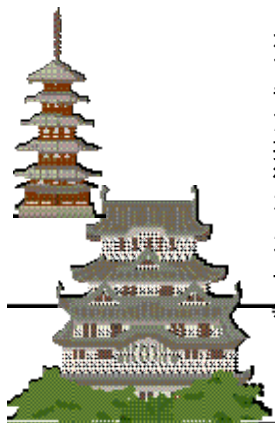
ただ断っておかなければならないことは、私には人に健康になってもらいたいという想いは、申し訳ないですけれどもあまり無いんですね。人はそれぞれに役割というものがあります。ですからそのことは治療に情熱を持ち続けていらっしゃる木村先生や真弓先生などのプロにお任せしたいとおもっています。そこは私のでしゃばるところではないし、また性分でもありません。それで、私は治療を目的としているのではないのに、なぜこのようなことを申し上げるのか。今回の講演祭の題目は「健康と環境」ということでした。つまり、生活環境である

住まいというものが、その人の健康を大きく支配している。また、肉体的な健康だけでなく、精神や判断力、さらに運命までも左右しているということ。この家に来た人が自分の不調が治ったという結果は、その実証の一つであるということ。を言いたかったわけ。

文化財のほんとうの価値

では、どのようにしてこの家を建てているのかというところが皆さん気になるとおもいますが、それは国宝や重要文化財を建てる技術と同じものを用いて建てているだけのことなんです。そして次世代に伝えるべきは、この祖先の技術であるというわけ。

「技術」というものの本質を一言で言うと、「自然の法則を活用すること」なんです。私たちはもともと自然から生まれてきました。そして今も自然の運行のもとで存在できているわけです。私たち人間を含めた全ての生命、またそれを超えて地球上の万物を適正な状態に保ってくれているのが自然の法則であるわけです。だから自然法則を活用して住まいを建てる時、その家もそこに住む家族も長持ちし、さまざまな恩恵に浴するというわけです。それが国宝や文化財に用いられてきた技術なんです。



国宝や重要文化財に指定されている神社仏閣など、誰しもが一度は見たいことがあるでしょう。でも、「法隆寺は綺麗だわね、姫路城は立派だわね」と、単に見ているだけでは何の意味もありません。ここで皆さんに考えていただきたいのは、文化財の価値というもの。はどこにあるかということです。文化財の文化とはなんでしょうか。

文化というのは、私たちの暮らしの中に脈々と流れていてこそ文化と言えるはず。法隆寺の建物が、姫路城の建物が文化ではない。建物を見ているだけだったら、それは文化ではなく単なる観光です。文化庁は名前を変えて観光庁にしたほうがいい。文化財は風雪災害を乗り越えて何百年何千年と耐久してきました。それは材木をはじめとした地球の資源を無駄遣いしない技術であり、産業廃棄物を出さない技術であり、あるいはシックハウスをつくらない技術であつたわけです。この国宝や文化財を建てる技術が、私たちの住まいを建てることに活かされてこそ、文化だということが言えるのではないのでしょうか。そして大切なことは今回の講演祭のテーマである次世代へ伝えるということ。この技術を子孫に伝達していかねばならない。

ところが今の文化庁は、文化財の「モノ」だけを保存しようというところばかりに躍起になっています。しかし、先ほど申し上げましたように、モノを残そうとするだけでは何の意味も無いんです。形あるもの必ず滅するとも言いますしね。あえて比較するならば、モノである建物自体よりも、その建物を建てる技術のほうが大切なわけです。その証拠に、技術さえあれば、たとえ建物が火災で焼け落ちたとしても、また同じものが作れるでしょう。文化には有形と無形があります。この両方を伝えていかなければなら

ない。建物が有形文化とするなら、技術は無形文化だといっていいでしょう。

文化財というものをとおして先人の技術を探求し、それを私たちの生活に活かし、未来へ伝承するとき、はじめて文化財というモノにも価値が生まれてくるわけです。なぜこのような建て方をしたのかを知り、それを私たちの暮らしに取り入れて、そしてこれからの子供たちに伝えていくことが大切なのではないかと。単に文化財を保存して飾っておくだけでは何の意味もありません。

技術の伝承

この技術というものは、手足や身体を使って覚えなければ体得できないものです。身近なところで言えば、車の運転を挙げればわかりやすいでしょう。車の運転技術はいくら机の上で勉強したってできるようにはならないですよ。今まで一度も車を運転したことはないのだけれども、交通法規も車体構造も操作方法も、世界中の本を読んで誰よりも深く勉強したという人がいたとしましょう。もしその人が実際に車を運転したら、50mも進まないうちに電柱にぶつけるのがオチです。ノミもカンナもたない大学の教授や博士は、机の上で図面とにらめっこしていくら計算しても、なぜこんな筋交い（補強用の斜材）も入っていない、石の上にポンとおいただけの強度計算もしていない建物や、長年の風雪災害に耐えてきたのか解らない。五重塔がどうして大きな地震でも倒れないのか解らない。技術とはそんなものです。

だから、技術というものは家を作る大工や職人たちが、日常の仕事をとおして体得していかなくてはならない。そうしなければ途絶えてしまっんです。し

かし、今の日本で国宝や文化財と同じ建て方を取り入れて家を建てることは、建築基準法という法律でできなくされているわけです。だから私たちは今のことで行政や国と交渉しています。モノを残すのではなく、精神を残す、文化を残す、技術を残す。肉体を残そうとするのではなく、生きざまを残す、遣伝子を残す。ということですよ。

生命の本性

みなさんサケを知っていますか。飲んだら酔っぱらうサケではなくて、泳いでいるサケですよ。（笑）サケというのは産卵のとき、自分が生まれた川を遡上しますよね。腹をこする浅瀬あり、落差の大きい滝ありと、困難と試練の中を必死になって泳ぎ続けます。ウロコは剥げ落ち、皮は裂け、肉は傷つき、あるものは熊に食われ、あるものは人間の手にかかりと。そんな試練を乗り越えて生き残ったものだけが産卵を許されるのですが、その勝ち残ったサケさえも産卵を終えたらみんな死んでしまうわけです。そうしてまで彼らは何をしようとするのか。それは困難を乗り越えて生きる生きざまを、遣伝子に刻み込んで残そうとするわけです。自分は死んでも、いのちを子孫に伝える。これが生命というものの本性です。この本性のおかげで私たちも祖先からのいのちを引き継いで今ここに居ることが



ところが、現代の人たちは子孫なんてどうでもいい、自分さえ良ければいいなんて思っています。ここにいる皆さんは違いますよ。（笑）だからね、今日こへ足を運んでいただいた皆さんは、自分が家を建てるのができなくても、子供には、孫には、伝えていって欲しいわけです。最近家を新築したばかりだから…、昨日マンションを買ったばかりだから…、そんなことは自分のことですよ。う。そんな言い訳は今日からやめて、「自分はちゃんとした家を建てられなかった。けれど子供たちよ、お前たちが家を建てる時にはきつとこのような家を建てるんだよ。」と伝えていって欲しいとおもいます。よろしく頼みます。ご清聴ありがとうございました。

応援ありがとうございます

先月号でもお知らせしたとおり、本誌『うつけ通信』がイネイトニュースに同封されてイネイト会員様のお手元に届けられるのは、今月号で最後となります。今後、宮本先生や呼吸大学からの情報は、基本的には呼吸大学の会員の方への会報を通してお届けすることになります。入会に関する詳細につきましては呼吸大学のホームページをご覧ください。なお、不定期的にはありますが、イネイトニュースの中でコラムとして掲載させていただくことも検討していただいています。今後ともよろしくお願いたします。これまで本誌を応援してくださったイネイト会員の皆様へは、この場をお借りして深く厚く御礼申し上げます。それでは良いお年をお迎えくださいませようお祈り申し上げます。

編集 ゼ口企画関西支部 (0724) 67-0644

担当 辻